

眠る傍ら



迷夢

## 夏の朝

---

夏時間

涼しい朝 青い空

鮮やかなカクテル 滴るグラスの汗

熟れた果実 銀のボウル

純白のレースのカーテンが 揺れる

そよぐ風にまかせた私は 寝ているあなたへと

白いシーツが 波を打つ

2008-09-10

## 蜻蛉（かげろう）

---

水面（みなも）から黒羽伸ばす細い身体

微かな波紋輪を てん と 尾先で描き  
卵を水中へ贈った

すい... と 祝福の水輪が幾重にも広がる  
ひと夜限りの生を夢とも呼ばずに 朝に散る

巡り逢う情熱が身体  
宿すべき情炎が生

## 陽炎（かげろう）

儚い生を映した姿は  
せめてもの悪戯

## 陰踏み

---

後ろの正面に居て 空聞(くうけい)想はせる 静寂

陽射し当たらぬ陰で 愛語り埋み火(うずみび)炊く 貴方

顔(かんばせ)赤々と 柔らかな房灰(ふさ・ほの)かに 燃ゆ

花托(かたく)硬い陰へ 濡(そぼ)ちを伝ふ

吐息 煙る

隠語 滴る

白昼 眩(まばゆ)き戯れ

## 白玉

---

十五夜に白玉 やわらに練った耳たぶを食む

わずかに赤い 今宵の満月

マッチ

---

潜るベッドは 冷えていて

羽毛に包まれようと 寒々しい

芯から あたたまる

あなたに逢いたい

わずかで いい

あなたの唇

ひとつで いい

ひと撫でされて

燃え 滾（たぎ）る

こころが

身体が

## Blue River

---

幾重も巻いた花弁が 可憐に笑む

秋咲き薔薇の 芳香に酔う

身の内を廻る 華やかな 快樂

幾度となく 誘われ続ける

やわらかな花弁への くちづけ

咬んでしまいたい衝動を あなたに  
器の隅々まで込み上がる 熱さを

彼の芳香 愛の秘薬

酔いの魔法に 明けぬ想い...

☆☆☆

Blue River[薔薇]



## 片思い

---

逢う毎（ごと）に 熱さ増す思い

胸に納まりきらない ときめきが 解放される

散った紅よ あなたに届け

糸になって絡み 鎖となってあなたと結ばれたいと  
熱い心が乞い続ける

濡らそうと冷えぬ この身が

あなたに焦がれて燃え尽き 塵となる前に

望んでも届かぬ 未来が

わたしに崖を踏ませて墮とし 沫となる前に

いつときの 思い出を

## 手探し

---

闇中で あなたへ腕を伸ばす

触れた指先は どこであろうと 貪欲に 告げる

愛しさと 乱れた 心音を

虚空の泉を あなたの指で

探られようとも

## おねだり

---

瞳を合わせただけじゃ足りない

髭を剃っても少し痛い頬に 指先をつたう

顎から喉へ 私と違う平らな胸へ

鼓動とは別に大きな呼吸に波打ってる

この下に あなたの心臓がある

ちょうだい この鼓動のすべてを 私に

心臓に包まれた たったひとつの魂を 私に

あなたが生きていると証明する スベテを  
出来る限り 私に

私の中へ 放り込んで

## 夜の唄

---

懐かしい唄を聴くと耳が　こそばゆくなる

ラジオから聴こえる　あれは　子守唄

肌を辿る手の温もりと同時に流れる　幼い唄

押されて漏れる喉声とは違う　音程で

掻き乱れる頭の中を　引き戻そうとさえする　郷愁

流れ込んだ細胞が　この身に宿るとでも告げられた　予感

愛讃えるやさしさを唄うのだろうか

この喘ぎ嘔（か）れた喉から

## 洗い髪の誘い

---

乾きはじめて髪は ほのかながらに

想いを募らす香りをたてた

鼓動を熱く高鳴らす 甘い愛の芳香

髪が乾くを待たずに 唇が濡らされる

唇が埋められ 唇だけでは終わらない

庭池の水面（みなも）で揺れたは 乾きを恥じた 月

かんしょく

---

腰たどる やわらかな髪に 逸る恍惚

唇よりも 優しくて ...

## 夜の会話

---

日頃の舌疾（したど）は何処へやら

頬内で蠢（うごめ）く今は 熱い吐息

気の利く言葉が湿りと化して 肌に蒔かれる

会話が甘く波打ち 身となって絡み合えるは  
闇が 理由

## すれ違いざまに

---

すれ違う前に見るのは、瞳。  
目力があって目覚めている瞳が素敵。

次は 首。  
筋ばってない、唇に柔らかくあたる肌で...  
しがみついても曲がらない、厚い肩から続く首が良い。

そして すれ違いざまに 指。  
ごつくても ほそくても 荒れてない指が良い。  
肌のうえを素直にすべる なめらかな...  
できれば そう 長い指が好き。

通りすがりの器用そうな長い指に  
ふれもしないで さよならを告げる。

あの指に苛められる肌を想像して  
ほんの少し 妬きながら。

## 秋波～しゅうは～

---

・・・其の瞳に魅了されるがまま 潜る

肌蹴（はだけ）た膨らみの揺れが 頭の中を一層狂わす

心を縛るも 叶えた繋がりには ひととき

互いが溢（あふ）れた後は 身体 ほどける

白肌を滑る涙痕（るいこん）は

透きとおった一筋を まだ揺れ納まらぬ頭に映す

愛しさ増すほどに 惨くも闇を早く退ける 秋

## Sleeping Sun

---

ああ、太陽とともに沈みたい  
眠りながら  
泣きながら  
貴方と一緒に

## 秋の契り

---

・・・ 渡り飛ぶ雁（がん）の影が

池に張る秋水（しゅうすい）を過（よ）ぎる頃

巡り逢う鼓動高く

搔（か）き抱（いだ）き合う肌

紅滲む爪痕を舐め合い また搔き求め合う

入（い）り込もうと 永久（とこしえ）は能（あた）わず

ひとつ身に

風

逸早（いちはや）く 冬を告げる

## ほんとうは意地悪

---

乱暴にしないで

でも

私を激しく求めて

だけど

指先は雛の頭を撫でるように 優しく

いつも

舌先に負けないほど やわらかく

たまに 意地悪をして

怒らない程度に 笑わない程度に

痛いのはイヤ いつも同じもイヤ

温もりだけでは もう 物足りない

熱い強張りを 焦（じ）らしては

あなたを たまには

泣かせたい

## 間に合わせの恋人

---

修学旅行

クリスマス

イベントで欲しくなった恋人に

甘さなんてなくて

なんとなく 流されて

身体の中で

シャボン玉が ひとつ壊れた

何も知らない 少女が消えて

月の巡りも それから消えた

壊れた後味 苦かった

## 紅霞～こうか～

---

夕照（せきしょう） やわ肌を舐め

色めく生气 誘（いざな）いに暮れる

深く深く...

---

愛し人（びと）の声が 指が 潜る意思が

髓を麻痺させ 操られる

朦朧（もうろう）と丸め込まれた自我が

律動と変動の波に 揺蕩（たゆと）う

溺れるこの身は 信じていない

息苦しく潤い続ける ここが

深海では ないなんて

## 狐の嫁入り

---

僅かばかりの空間に ふたり 踏み込む。

陽光への羞恥が 情を惑乱させ

捉えられた肌に熱が灯る。

雨粒が点々と光る硝子戸に

知らぬ間に訪れ去った雨を知らされる。

鼓動高ぶり 愛し人（びと）と汗と肌を摺り合う今は

不思議と優しい気持ちばかりが 湧き上がる…。

たとえ狐の面（めん）被（かぶ）る物の怪（もののけ）の

輿（こし）入れであろうと

満ち足りた温もりが

祝福を惜しませない。

☆☆☆

狐の嫁入り…晴天だけれど小雨が降るお天気の話・民話

☆☆☆

## 視線

---

あなたの視線を私は追う

あなたの見るものすべてを私は眺める

あなたの視線が素肌の私に定まったなら

あなたに私はすべてを開け曝（さら）け出し

あなたに虜（とりこ）になった魂までをも

欲しがる其の目に突き刺される刹那を 待ち侘びる

虚空

---

おいで

愛しい呼び声に縋り躍る心

ああ 脆くも 体温を 感じる前に幻影は消え

掌は 闇を握る

## 句[バナナ]

---

時過ぎて

痛み多くも

甘く熟れ

★★★(o^m^o)

## ひとりじめ

---

あなたを

ぬるぬると はいまわり しめつけて とろかせる

とおくへと いざなっては あまくしめったせかいに もどる

あの いっしゅんの あざやかなひかりを

いきはずませる あなたに ささげるのは

わたし だけ

...<sub>3</sub>

## Intrigue [密通]薔薇

---

見目も艶やかな姿

甘く胸の奥底へと入り込む芳香

酔い痴れたのは 瞬く間

手を伸ばせば拒む仕草無く

無防備に触れさせた

しなる姿態を引き寄せ 唇でつまみ

硬く巻く気高い花弁が やわらかに捲れる

かつてない深い宵

香りにも勝る甘い蜜に 身も心も浸る

重ねる逢瀬 甘美な罪

もう 香りを言い訳には出来ない

## 墮天

---

指先が　ときめく胸を這う。

片手が唇と交替して　翼の無い背中へ。

抱きしめられる　ぎゅっと。

ほぐれても　何処かが触れあい　何処かは繋がってる。

も　う　誰であるか　我を忘れても

深くに潜む　あなたが　あなたでさえあれば　いい。

纏（まと）わり付かれる熱　反り返る欲望は

風吹く空よりも　魅惑が広がる。

これほど自由に　浮遊できるのなら

翼無き徒人（ただびと）と呼ばれようと　それで　いい…。

## Time limit

---

波まだ満ちずに 人目を忍ぶ岩陰

火照った身体を冷ませと 降りかかる水飛沫

さがしあてたあなたとの 限り在る時間

張りつめる

ふくらんだ胸が 心臓が あなたが  
すべてが破裂するまでの うたかたの時

私を罪だと決め込んだあなたは

瞳の潤いに気づかないふりをして

去る準備だけをしている

## 羽根のかおり

---

逢いたかった

今は 絡み合う腕を咎(とが)める者なんて

誰も

いない

あなたとのKISSは少し痛くて

私を抱く体は重たくて

頬を撫でる髪は ほこりっぽい

そう...

自由を謳歌し

飛翔していた鳥の

翼の香り

私へと

舞い降りた